

Café des open

三浦一族



Menu 第26回

4代将軍藤原頼経と 三浦一族

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

建保7年（1219）正月、源実朝が、鶴岡八幡宮で甥の公暁により殺害されると、源氏将軍はわずか3代で途絶えます。幕府は、後鳥羽上皇の皇子を新たに鎌倉殿に迎えようと交渉しますが、上皇の了解を得られず、実現しませんでした。しかし、摂関家の子弟については拒絶されなかったため、摂政関白を歴任した藤原道家の御曹司が鎌倉に送られることとなりました。その子は、三寅（みとら）といい、後の4代将軍藤原頼経（よりつね）となります。しかし、鎌倉に送られた時点で三寅は僅か2歳で、到底将軍職が務まるような年齢ではありませんでした。そこで、三寅が成長するまでの間、北条政子を中心となり、政治を進めます。その後、三寅は元服し頼経となり、嘉禄2年（1226年）に征夷大将軍の任官を受け4代将軍となります。しかし、この時点においても頼経は9歳とまだ幼く、将来にわたり信頼のおける近習が必要でした。貞応2年（1223）10月13日の『吾妻鏡』には、6歳時の三寅の近習番が記されています。その中には、三浦泰村・光村・家村ら兄弟（いずれも三浦義村の子）の名を確認することができます。さらに、嘉禎3年（1237）3月8日の同資料においても、引き続き光村が頼経の近習番であったことが記されています。これらのことから、泰村・光村・家村ら兄弟は、頼経の幼少期の近習番であり、さらに光村については幼少期から長年にわたり頼経を支え続けた最側近ともいべき人物であったことがわかります。

頼経と三浦一族との関係の深さは、頼経の行動からも確認できます。安貞2年（1228）7月、頼経は義村の求めに応じ、義村の田村山荘（平塚市）へ赴き、笠懸などが行われ、2日間ほど滞在しました。これ以外にも、頼経は度々三浦一族の屋敷や別荘を訪問しており、さらに妻を伴って義村の屋敷を訪問したこともありました。実は、頼経がこれ程まで特定の御家人の屋敷や別荘を訪問している例は他にみられないことが指摘されており、両者の関係性の深さが窺われます。このように、義村や子の光村らは、将軍頼経と非常に良好な関係にあり、三浦一族は鎌倉幕府内において安定した立場を築いていました。

しかし、そうした状況も徐々に変わり始めていきます。

頼経が大人になり、将軍としての存在感が増していくにつれ、頼経は次第に執権北条氏と対立する反執権勢力を糾合する存在になっていきます。寛元2年（1244年）4月、頼経は将軍職を退き、子の頼嗣に譲ります。しかし、頼経はその後も鎌倉にとどまり、「大殿」（おおいとの）といわれ、将軍の父として幕府内で力を持ち続けました。頼経には、反執権勢力であった北条一門の名越一族らが近くしていました。そうしたなか、4代執権北条経時が病で亡くなります。これを機に執権勢力の失脚を狙い、名越氏による反乱未遂事件が生じますが、寛元4年（1246）5月25日、5代執権北条時頼は機先を制しこれを未然に抑え、その企てを行った名越光時を出家後伊豆に配流にし、弟の時幸を出家後、自害に追い込みました。さらに評定衆の頼経派の面々を罷免させ、頼経も鎌倉から京に追放します。同年7月11日、頼経の上洛に際し、光村は供奉人として同行しました。同月27日、一行は京に到着し、同行した御家人らは鎌倉に戻っていましたが、光村はその後も京に留まり続けました。しかし、8月12日、ついに頼経との離別の時を迎えることとなり、光村はその別れを惜しみ、数刻の間、頼経の御簾の前でとめどなく



藤原頼経像（『集古十種』第1巻）

く涙したといひます。光村の様子について、『吾妻鏡』は「20余年側近の立場にあつたからだろう」と記しています。その後、光村は人々に「ぜひ鎌倉にもう一度頼経公をお迎えしたいと思う」と語ったといひます。これは、光村の頼経への強い忠義の表れでしたが、一方でこうした処分を行った執権北条氏への強い不満の表れでもありました。

もともと、執権北条氏と三浦氏は婚姻関係を結び、密接なつながりを有していましたが、この頃には両家を繋いでいた人物が次々に死没していくなど、その関係性も以前ほど強固とはいえなくなっていました。また、光村のように、三浦一族の中には、執権北条氏に対し、強い不満を抱く者も出てくるようになります。そうした状況の中で、いよいよ三浦惣領家（本家）が滅亡する宝治合戦を迎えることとなるのです。

参考文献：高橋秀樹『北条氏と三浦氏』（吉川弘文館、2021年）